

大祓詞

高天原に神留まり坐す 皇親神漏岐 神漏美の命以て 八百萬の神等を神集へに集へ賜

ひ 神議りに議り賜ひて 我が皇御孫命は 豊葦原水穗國を 安國と平けく知ろし食せ

と 事依さし奉りき

比く依さし奉りし國中に 荒振る神等をば 神問はしに問はし賜ひ 神掃ひに掃ひ賜ひて

語問ひし磐根 木根立 草の片葉をも語止めて 天の磐座放ち 天の八重雲を伊頭の千別

きに千別きて 天降し依さし奉りき

比く依さし奉りし四方の國中と 大倭日高見國を安國と定め奉りて 下津磐根に宮柱太敷

き立て 高天原に千木高知りて 皇御孫命の端の御殿仕え奉りて 天の御陰 日の御蔭と

隠り坐して 安國と平けく知ろし食さむ國中に成り出でむ天の益人等が 過ち犯しけむ

種種の罪事は 天津罪 國津罪 許許太久の罪出でむ

比く出でば 天津宮事以ちて 天津金木を本打ち切り 末打ち断ちて 千座の置座に置き

足らはして 天津菅麻を本刈り断ち 末刈り切りて 八針に取り裂きて 天津祝詞の太

祝詞事を宣れ

比く宣らば 天津神は天の磐門を押し披きて 天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて聞こ

し食さむ 國津神は高山の末 短山の末に上り坐して 高山の伊褒理 短山の伊褒理を搔  
き別けて 聞こし食さむ

比く聞こし食してば 罪と云う罪は在らじと 科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く

朝の御霧 夕の御霧を 朝風夕風の吹き拂うふ事の如く 大津辺に居る大船を舳解き放ち

臚解き放ちて 大海原に押し放つ事の如く 彼方の繁木が本を焼鎌の敏鎌以ちて 打ち掃

ふ事の如く遺る罪は在らじと 祓へ給ひ清め給ふ事を 高山の末 短山の末より 佐久那

太理に落ち多岐つ 速川の瀬に坐す瀬織津比売と云ふ神 大海原に持ち出でなむ

比く持ち出で往なば 荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速開都比売と云ふ神

持ち加加呑みてむ

比く加加呑みてば 氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神 根國底國に氣吹き放ちてむ

比く氣吹き放ちてば 根國底國に坐す速佐須良比売と云ふ神 持ち佐須良ひ失ひてむ

比く佐須良ひ失ひてば 罪と云ふ罪は在らじと 祓へ賜ひ清め賜ふ事を 天津神國津神

八百萬の神等共に 聞こし食せと白す